妙の光（たえのひかり）

通刊38号 **復刊15号**
1995年7月25日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 TEL0256-77-2025

ほたる

小川なつみ

きのうの夜、ほたるを見に行きました。おまの池の方には、ほたるがいます。

池のそばにいってみると、一ぴきのほたるがフーと、わたしたちの目の前を通っていきました。草をかきわけながら、そのほたるの後を追いました。気がつくと、わたしたちの目の前には、ほたるが何十ぴきといたのです。わたしは宇宙空間をさまよっているような感じがしました。とてもきれいでした。

草の上に乗っているほたるを手にとりました。ほたるは、手の中でも一生けん命に光っていました。そのほたるをにがしました。わたしにはそのほたるも、回りのほたるも、とてもうれしそうに飛び回っているような感じがしました。

わたしは、そのほたるたちを、いつまでも見守っていたいような気がします。

幸福の条件？

小川英爾

温泉で有名な大分県別府市。ここに身体障害者千人が、働いて暮らす施設「太陽の家」がある。ホンダ、富士通、三菱、オムロンといった大企業の子会社を作り、職場が確保されている。そこには職員として五百人の健常者も働いていて、スーパーに銀行の支店まである。そのスーパーの店員も銀行員も障害者。市内にあって、一つの町内を形成している。この「太陽の家」に勤める、学生時代からの友人を訪ねる機会があった。

彼は東京生れの東京育ち。東京工業大学でロボット工学を専攻、指導教授の勧めで技術者として就職、二十年になる。今は開発課参事。久し振りに会った私と、同行した私の後輩で九州に住む坊さん二人を施設案内してくれた。その後、夕方の町に出て焼酎を交わしてのよもやま話となる。

そこで彼の話。「太陽の家には、脳性まひなど生まれながらの障害で、最初から歩けない人もいるし、事故による脊髄損傷などで、人生の途中から歩けなくなった人もいる。健常者から、事故で車椅子の生活になった人の一人Aさんから、ある日こんな質問をされた。生まれながらにして歩くことを知らない人よりも、自分みたいに健康で学歴もあり、仕事は充実して家族とともにそこそこお金に不自由のない生活から、突然歩けなくなった人間の方が不幸だよな、と。答えに窮したが、Aさんの気迫に押されて、あなたの方が不幸かもしれない、と答えてしまった。こうしてAさん、幾人もの人に自分の不幸を確認して歩き、結局酒に溺れて肝臓を崩し、亡くなってしまった。それ以来Aさんの考え方のどこがおかしいのか、何年も悩んできた。Aさんは自分で幸福の条件を色々考えて、それを他人と比較して自身を不幸にしていったのではないか。人間の幸福とは他人と比較する中で感じることではなく、今ある自分を認めることから始まるんではないのか」

この話を聞いて、私はひろさちや氏の話を思い出した。氏はやさしい仏教解説で有名な宗教学者で、テレビにも顔を出す。その話とは、幸福にはまちがった幸福と、真実の幸福の二種類がある。まちがった方を「餓鬼の幸

福」、真実の方を「ほとけの幸福」と名づけた。餓鬼とは、自分の持っているものに満足できない気持ちをいう。「餓鬼の幸福」とは、とうに満たされているのにもかかわらず、それには満足できずにもっともっと次を望むこと。いつもこれでは足りないと、自己を否定的に見ることから始まる姿がそこにある。テストで八十点取った子供に次は九十点、九十点取れば次は百点、百点取ればずっと百点を、次々に要求する教育ママがいい例。

一方「ほとけの幸福」とは、今ある自分そのままが幸福だ、というもの。金持ちは金持ちのままで、貧乏人は貧乏人のままで幸福な人のこと。「餓鬼の幸福」では、金持ちが幸福で貧乏人が不幸、健康な人が幸福で病人は不幸となってしまう。これでは幸福に順位ができて、全ての人が幸福にはなれない。「ほとけの幸福」なら、すべての人が幸福になれる。

例えば、「あの人に比べれば私はまだいい方だから」、という納得のし方。あるいは「百円しか持たないあの子より、五百円持ってるあなたの方がいいでしょ」という説得。これは「でも千円持ってる子もいるよ」と言い返される。比べるというのは、自分を否定的に見てしまいがちである。その点「ほとけの幸福」は、自分と他人を比較せず、自分が今ある、このままの自分でいいんだ、と絶対的に自分を肯定すること。

むろん貧乏人が金持ちになろうとすること、病人が治ろうとすること、子供が成績を上げようとすることも悪いことではない。でも貧乏人が貧乏人でいるあいだの自分を、否定的に見る必要はない。病人のままでも幸せになれるし、貧乏なままでも幸せになれるのだから。病気の自分を、貧乏の自分を、そのまま全面肯定することが大切で、それが「ほとけの幸福」というわけ。ここまでがひろさちや氏の話。

自分を全面的に肯定するということは、同時に他人を認めることにつながる。法華経常不軽菩薩品第二十の中で、常不軽菩薩という人は、道で出会う全ての人達に向って、「私はあなたを敬います。どのような方でも仏になれる性質をもってらっしゃるのですから」と礼拝された。「太陽の家」に勤める友人はさらに、「障害者の人達と暮らして、さまざまなことを学ばせてもらった。当然のこととは言え、厳しいなと思うことは、千人も障害者が一緒に住んでいると、俺は障害者だと言って甘えた考えの人は、ここではやっていけないということ。」幸福になる苦労とは、物を得る苦労ではなく、自己を肯定し、同時に他人を礼拝する修行であると改めて考えさせられた。

信心

農業に専念する情熱家夫婦

大滝　剛（45才）さん
幸子（41才）さん

剛さんは、五十年余り檀家総代を務め、信心家として知られた故大滝金吾さんの孫。農家の長男で祖父母、両親と同居のせいか、三十二才になっても結婚に縁遠かった。そこに郡内潟東村に住む幸子さんを紹介したのが、角田浜で檀家の娘さん。三人が農業高校の同窓生同志という縁があった。ところが幸子さんは三人姉妹の長女で、次女が嫁いでしまった農家の大事な後取り娘。ときに幸子さん二十九才のとき。

暮れの十二月、初めて会った二人は互いに心引かれた。二回目のデートに、真紅のバラを一本携えて現れた剛さんの情熱に、幸子さんは結婚を決意する。しかし幸子さんの両親は猛反対、同意が得られないならと二人は覚悟を決めた。当時、農業の将来に不安を抱いていた剛さんは、土木工事の重機の運転手に従事、出張先の長野県松本へ、大雪の降る一月末二人は駆け落ちを実行した。

半年後の夏に戻るが、相変わらず両親の同意が得られずその年の十二月、結婚式を挙げた。出席者は剛さんの親族と友人、幸子さんの方は多くの友人達。親族はたった一人、下の妹が控室にだけ来てくれた。

以後、剛さんの病気後の父を支えて二人は農業に専念、一年後には長男も生まれた。そこへ妹から「お父さんが胃ガンで手術」との連絡。二年半ぶりに顔を合せた父は「お前が心配かけたせいで病気になった」と、ベットの上で言った。

幸い手術は成功、全快する。これを機に両親の理解を得、幸子さんのために買ってあった箪笥を運んできてくれた。今は行き来も頻繁。

二人を中心に家族が二町歩の畑で、西瓜、メロン、長芋、ごぼう生産に忙しい。その上、剛さんは推されて農協の最年小理事も務める。それでも毎日夕方、皆で仏壇参りを欠かさず、小学四年を頭に三人の息子達もお経を読む。

剛さんは住職と齢が近く大事な相談相手で、若い檀家のまとめ役でもある。幸子さんは台所係として寺の行事を欠かさない。

充実した毎日を過ごす二人だが、幸子さんの実家では下の妹も嫁いで両親と祖母の三人暮らし。農繁期には無理をしがちな父の体が気がかりとなっている。

寺の動き

護持会費お願いします

平成七年度分の護持会費をお願いしています。収支報告書に詳細がありますが、総額で四百万円弱の決算です。内訳が床下工事の借入返済に百万、境内管理に百万、教団賦課金と建物営繕で各五十万、その他。予算もほぼ同様。ご協力願います。

あわせて佐渡団体参拝旅行のご案内も配布しました。静けさをとり戻した晩秋の佐渡、じっくりと日蓮聖人の霊蹟寺院を巡拝します。県外等、遠方で当日朝の集合が大変という方は、前日に妙光寺泊まりでどうぞ。

前々からお伝えしてきた池庭工事ですが、丸々一カ月を要して滝と植栽の地形造りが完成しました。山の沢から引いた水が、静かに音を立てて流れ落ちています。ところが沢の水量が不足気味で、夏の渇水期にどうしたものか、困っています。

工事は施主の遠藤茂五郎さんの指示で、埼玉県川口市の戸塚造園が泊まり込みで担当。その応援に遠藤さんの甥の息子に当る遠藤均さんが、妙光寺の檀家でもあり、奉仕で連日通って下さいました。均さんは三十一歳、東京農大造園学科卒業後、東京の大手造園会社に勤務。この春に、新潟市内のお父さんの会社の造園部門を手伝うために帰郷されました

今後、設計の野沢先生ご指導のもと、秋をめどにあづま屋建設、植栽と進行の予定です。

題目堂の修復工事も、お水屋の方が見事に完成しました。老朽化と湿気によるいたみが激しく、工事も大変でした。柱と彫刻を残して、尾根から外壁までを一新、見違えるようです。二期工事として、現在題目堂自体の増築工事が着工されました。

施主である角田浜の斉藤政六さんも毎日のように顔を出し、ときには家族総出で清掃など、作業の進行を助けています。完成時に改めて詳細ご報告します。

本堂建替計画の方は、六月末に県文化財保護指導委員の山崎氏と、前文化庁建造物課長で現長岡造形大学の宮澤教授に、建築史の観点から見ていただきました。いずれご報告します。

鎌田義明は身延山での修行を終え、戻りました。命日のお経や、住職と法事に伺っております。

妙光寺史話

〈角田山御歴代控〉より（三）

五、全山焼失―諸堂建立

(1)「三十一世日饒上人の住職の時宝永五故三月焼失（一七〇八）享保元申諸堂佛像建立（一七一六）」と記してある。

また、日饒上人が代官、西与市左衛門にあてた「書付を以御注進申上候事」という三月二十五日付の報告文書がある。

これによると、焼失したのは

一・本　堂　梁間八間　桁行拾間　壱軒

一・庫　厘　桁間四間半　壱軒

一・学問所　梁間四間　桁行九間　壱軒

一・廊　下　梁間　弐間　桁行四間　壱軒

〆　四ケ所　桁行　四間

「日蓮宗妙光寺昨二十四日之夜八ツ時、勝手火たき所より出火仕候、折節、拙僧義法用ニ付壱里外、五ケ浜村と申所へ…」

「殊ニ海辺ニテ西風烈敷吹懸り、留守ニ残居弟子、下人〆六人罷出候得共、ふせぎ可申様も無御座…」

「生類之けが一切無御座候」

八年間で諸堂、佛像共建立とあるが、住職は勿論、檀徒が総力をあげて復興にあたったものであろう。特に日饒上人の生家である五ケ浜の遠藤家は物心両面にわたって先頭にたって努力されたものと思われる。

○「高祖大士御木像壱躰造立、施主人は巻、藤田正伯」と記されている。

正伯は現在の巻町の藤田写真館の先祖だという。代々新発田藩の御典医（江戸時代、大名に仕えた医師）だったが、峰岡藩の御典医に迎えられた。

○「四天王、施主人、新発田大守清口信濃守殿奥様、御隠居ニテ当山へ御参詣遊ばされ、その節御寄進、享保二十閏三月五日（一七三五）とも記されている。その節は、峰岡藩の御典医だった藤田正伯も同道で御参詣されたのかもしれない。

(2)「無住之内又候（またまた）、宝暦六子六月（一七五六）焼失」

五十年のうちに二回も焼失したことになる。三十二代日遥（後に日進と改める）上人の時である。焼失時住職は江戸に滞在されていたようである。

「宝暦九年（一七五九）庫裏建立

○宝暦十年　番神堂建立

○宝暦十二年　本堂建立にとりかかる。

○宝暦十四年（一七六四）三月十八日、本堂棟上ケ。七月二十日より二十四日まで入佛」　三十三世日耀上人の時代であった。

宝永五年と宝暦六年の二回の焼失にもかかわらず、幾多の困難を乗り越えて現在の本堂が再建された。

材料や彫刻などを見ると他の寺院に比して、必ずしも立派だとは言い難いが、日蓮宗本来の建築様式だと言われている。

今から二百数十年前、私共の先人が、多額の寄附と連日のように続いた労働奉仕によって完成したであろうことを考えると、老朽化した本堂全体に先人の信仰心の結晶がひそんでいるよう思えてならない。

(3) 山門建立

「文化十年（一八一三）三十七世日妙上人の時代、細工始。文化十二年竣工、檀中より三拾両頼母子金上ル」。檀徒が頼母子講（無尽）をおこして、山門建立の経費にあてたと記してある。

本堂建立から二百三十一年、山門建立から百八十二年の歳月が流れた。

山門と本堂を望みながら、歩を境内へ進めると自ずと心の安らぎを感じると人は言う。観光で訪れた方も、後日二度三度と訪れる場合が多いと聞く。

地元角田に住んでいる私も、妙光寺に漂ういろいろな魅力にひかれて、しばしば訪れている一人である。

（次号は長岡藩との関係について）

（石田誠太郎）

―寺の自然―

妙光寺のカラス天狗を追って

藤田　久

京都の鞍馬寺時代の牛和歌丸に、修業相手をしたともいわれるカラス天狗のモデルが、ここ妙光寺にもすみついています。境内のなかほどに立つ松やケヤキの木にぽっかりと丸い穴があいているのをご存知でしょうか。そこがカラス天狗こと夜行性動物ムササビのねぐらなのです。

「カラス天狗の正体」

ムササビには、〝夜の忍者〟とか〝空飛ぶ座布団〟の異名もありますが、地域によっては〝晩鳥〟とか〝モモンガ〟などと呼ばれており、飛膜を使ってグライダーのように木から木を滑空移動するのが得意な「齧歯類」というリスの仲間なのです。新潟県内では角田山のような里山に普通に生息する野生動物ですが、夜行性のため気づかれずにいることが多いようです。

体色は濃い茶褐色で腹部が白く、ネコぐらいの大きさです。その頭と胴をあわせた長さ分のふさふさした尾と、幹を駆け上がるためのするどい爪をもちあわせています。顔つきは大きな白い眉毛とつぶらな瞳、それとはあまり似合わない団子鼻のもち主なのですが、これも樹上生活や滑空のために敵した特徴をもっているので、けっこう愛らしい風貌なのです。

「ムササビウオッチング」

言ってみれば、ムササビはこんなに身近に生息する動物なのですが、いざ、その生態となると、まだまだ見えてこない部分があります。そこで、このカラス天狗を追ってナイトウオッチングに新潟西高校の生物部の生徒を引き連れ、三年前から妙光寺さんのお世話になっています。

いつも夕方にやってきて軽い食事を終え、日没前、巣穴の周囲に張り込みます。そして懐中電燈やトランシーバーを使用して移動を追いながら、使われた木々や行動、時刻等の記録を書き留めます。木の茂みや林内にもぐり込まれると見失ってしまうのですが、そこは経験からしてじっと待っていると再び目にすることがあります。このようにして時には徹夜をし、翌朝の帰巣まで観察を続けることもあります。

始めた当初は、境内周囲を念頭に

守備範囲を考えていたのですが、今は隣接の「熊の神社」参道から海岸松林、さらに墓地を越え「題目堂」付近まで追って行くはめになりました。予想以上の広範囲に観察域が及んで今さら引き下がるわけにもいかず、今後はどう展開したらよいのか頭を抱えているところです。

「ムササビと私の出合い」

今から二十年もさかのぼる高校教師になりたての頃の話になりますが、平凡社からの「アニマ」という動物雑誌に東京高尾山のムササビ特集を読んだことから始まるのです。新潟市出身の私は、雪深い東頚城郡の松代町にある松代高校生物部の顧問をしていました。部員の一人がこの雑誌を見つけ、うちの山にも〝モモンガ〟がいることを教えてくれたのでさっそくブナ林にある巣穴をのぞきに出かけました。

わくわくした気持ちで待っていると穴のなかに目が二つ光り、黒いものが幹を駆け上がっていくのが確認されました。少ししてすうっと森に黒い影が消えていきました。ほんの一瞬でしたが、自然のドラマをまのあたりにし、この続きが見たいという強い思いから部員とともに森に通い出したわけです。

しかし、ムササビを見つけても観察は途切れるばかりで、一向に進歩がなく挫折の連続でした。植物生態学が専門の自分には、これ以上は無理と判断し、思いきって内地留学を願い出て動物行動について勉強する機会を得ることができたのです。おかげで鍛えられ再び、森に通い一定の成果をあげられるようになったという経緯があります。

そこで今は、ムササビの棲息地である弥彦神社や角田山の近くに住みたいということで巻町に住居を構え、若き頃の夢を満たしています。この三年間は妙光寺に通い、ムササビに関する興味ある観察が得られたのはもちろんですが、同時に四季折々の自然にもふれながら他の動物との出合いがいくつもありました。豊富なムササビ情報とともにこれらを連載し紹介していこうと思います。

（新潟西高校教諭）

フェスティバルにご参加下さい

先にご案内の通り、第六回フェスティバル安穏を八月十九、二十日に行ないます。これは埋葬者への皆さんによる合同供養と、あわせて会員、檀家、地域の人達、あるいは安穏廟に関心を寄せる人達との交流、そして安穏廟、妙光寺の宗教世界への理解を広めることを目的にしています。

今年はパンフの通り、いろいろな方のご縁でデンマーク、大阪、中国から講師、演奏者を実費程度でお願いすることができました。テーマを通して高齢者福祉に限らず、宗教、人間関係といった幅広い語り合いにしたいと思っています。

これも早いもので六年目。第一回は別格として、以後回を重ねるごとに内容、参加者ともに充実してきています。今年も反響が大きく、参加申し込みも早いペースです。

その一方で、運営費の中心を基金の利子収入から拠出していますが、超低金利の昨今これが減少の一途です。せっかく盛り上ってきているのに運営費が厳しいという状況の中、スタッフが頑張っています。どうぞ多数の会員の方の参加をお待ちしています。あわせて安穏法会でのローソク献灯もお願いします。

前の号でご案内した、昨年のフェスティバルの記録集「'94妙光寺の夏」に、多数のお申し込みありがとうございました。毎日新聞等で紹介されたこともあり、全国から書店経由の注文もありました。まだ残部も多数あります。

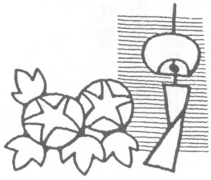
会員の方に読売新聞の切り抜き「将来、痴呆になっても効力続く資産管理の委任契約に注目」を同封しました。この会の事務局長で弁護士の有坂正孝さんは、新潟弥彦村のご出身で安穏廟もご覧になっており、妙光寺との交流もあります。相談してみたいという方は、ご紹介しますのでご連絡下さい。

今年度分の会費三千五百円をお願いします。先頃、郵便局の振替用紙をお送りしました。ご入金後こちらへの連絡が一週間、折り返し受領書を発送しています。ご不明の点はお問い合せ下さい。

お盆法要は八月一日午前十時半から安穏廟前で。個々にお経を希望される方は朝から随時受付します。詳しい日程は12ページを。

寺庭から

「優しさに包まれて」



自分の体を過信していたので、突然の入院に驚いた。それこそ朝の洗たくもそのままほったらかして、一ヶ月以上も入院する破目になった。

独身の頃、軽い病気で入院したことがあったけれど、その時の気持ちとはずい分違うものだなあと思う。自分の体のことよりも、家のことが気になって仕方がない。留守中の家族の負担を考えると、早く元通りの生活に戻らなければ、というあせりに似た気持ちが強い。

私が入院してからは、家族の皆がとても優しい。実家の母はお寺に泊まりこんで、私の変わりに家事を全部引き受けてくれた。おかげで単身になった父は、仕事が忙しい時期で少しやつれていたが、「自分で洗たくもごはんも出来るのだから、何も心配はいらないからゆっくりと治しなさい」と言う。

住職である夫は、仕事の予定をあれこれやりくりしてくれて、育児と家事に私以上の才能を発揮して何とか乗り切った。弟子の鎌田くんはお寺の仕事の上に、ゴミ当番や食料の買い出しを担当。ようやく家で落ちついた義母は一時的にまた病院に行ってもらった。そして約束を変更して下さった檀家の方々には、たいへんな御迷惑をおかけしました。申しわけありませんでした。

入院中に届いた友人の手紙の一部、

実は同居している義父が先日死去いたしまして、今少し落ちついたところです。長い間の病気持ちで義父も大変でしたが、最後は静かでした。（略）義母は今の所元気でいつもと変わらないように見えるけど、親戚の人たちも心配してくれて、私もできるだけ心の支えになってあげられたら…と思います。今はみんなが気持ちをひとつにして頑張っています。

平穏な日常生活にも、時には死や病気、思いがけない事件が起こったりして影がさすことがある。そんな時、手紙の彼女のように「みんなが気持ちをひとつにして…」家族の中に思いやりと優しさが満ちてくるのに違いない。

病気になると気が弱くなって、人の優しさが心にしみる。そしてありがたくて、今度は無性に人に優しくしてあげたくなってしまうのだった。

小川なぎさ

行事案内

八月一日（火）

お盆墓参り、施餓鬼法要

午前五時半　墓お経受付開始
〃　十時半　安穏廟法要
〃　十一時　施餓鬼法要
昼　十二時　おとき
午後一時　説教　豊田良雄師

本堂での法要のために、十時には墓地からお上人方がいなくなります。早目にお出かけ下さい。

施餓法要の塔婆申し込みは、準備の都合上前日までにお願いします。

新盆のお宅は施餓鬼法要で特別にご回向します。参拝下さい。

八月十三日～十六日

お盆棚経

例年通りに住職と鎌田、それにお手伝いのお上人が手わけをして全檀家に伺います。いつになるか知りたい方は、十日過ぎにお問い合せ下さい新潟地区は早目になるかと思います。その場合はご連絡します。

八月十九日（土）

岩屋七面宮祭礼

午前十時　本堂で法要、お加持
岩屋へ移動、法要
昼十二時　参詣者に赤飯供養
午後　フェスティバル安穏に参加下さい。千円

八月十九、二十日

第六回フェスティバル安穏

安穏廟の供養祭。詳細はパンフで。

九月十日～二十日頃

東京方面お彼岸経

住職がお盆の代わりに伺います。

九月二十三日（土）

秋のお彼岸中日法要

午後十時半　安穏廟法要
〃　十一時　秋期彼岸会法要
おとき、説教有り。

あとがき

思いがけない妻なぎさの入院騒ぎでした。股関節の炎症で子供に多い、というのが不思議です。手術する訳でもなく、もっぱら安静にして足を引っぱることと薬だけ。幸い寺の行事が全くない時期で、こうなったら「仏様にいただいた休暇と思って、のんびりすることにした」のはいいのですが、さすが五週間は長かったようです。おかげさまで七月十八日、退院しました。

雨の多い今年の梅雨です。農家の方も困っておられます。体の不調を訴えらえる方も多いみたいです。健康的でいい夏を過ごしたいですね。

（小川記）